田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２３年１２月０６日更新分

■　米景気鈍化の傾向が徐々に強まりつつある…

前回更新分の本欄で触れた米連邦準備理事会（ＦＲＢ）のウォーラー理事による２８日の発言に対する市場の受け止めが、いまだに尾を引いているように思われる。

ウォーラー氏に罪はないのだが、市場は同氏の発言を「来年の利下げに前向きであった」と勝手に解釈してしまった。その後、複数のＦＲＢ関係者らが“火消し”に走ったことで一旦は軌道修正されたように思われたが、いまだ市場には前倒しでの米利下げ観測が蔓延り続けている。

先週末１日には、パウエルＦＲＢ議長も“火消し役”に回ろうと講演のなかで複数のタカ派寄りコメントを発したのだが、僅かにハト派姿勢も滲ませており、そこにだけ市場の関心が集まってしまった。結果、１日の米１０年債利回りは一時４．２％割れの水準を試す動きとなった。

むろん、週明け４日には少々行き過ぎた米金利低下の反動も見られてはいたが、米国債利回りとドルの戻りは依然鈍いままで、ＣＭＥのＦｅｄＷａｔｃｈツールでは今のところ来年３月の米連邦公開市場委員会（ＦＯＭＣ）の政策決定を「利下げ」と見る向きの方が「据え置き」よりも多い。

もっとも、市場の見方が「まったく勘違いも甚だしい」というわけでは必ずしもない。日々発表が続く米国の各種重要指標の結果は、比較的弱めのものが少なくないことも事実。１日に発表された１１月の米ＩＳＭ製造業景況指数は市場予想を下回るものであったし、４日に発表された１０月の米製造業新規受注の結果からも減速傾向が明らかに見て取れる。

かねて「米国経済は１０－１２月期以降に成長が鈍化する」と見る向きも少なからずあったわけだが、そのことがハードデータの上で徐々に証明されようとしている。

昨日（５日）発表された１１月の米ＩＳＭ非製造業景況指数はやや強めの結果であったが、サービス需要を底上げしてきた米個人消費の好調さが「それほど長くは続かない」と見る向きも少なくはない。実際、足元では雇用主が採用を縮小し、賃金の上昇ペースも鈍っている

同日発表された１０月のＪＯＬＴＳ（米雇用動態調査）を見ても、米求人件数が趨勢的な減少傾向を辿っており、米労働市場が冷え込みつつあることは明らか。何より、ここにきて自発的離職者の数が見る見る減少してきており、別の仕事を見つける自信を一頃よりも失っている米労働者の現状が浮き彫りになってきている。

ＪＯＬＴＳの結果が発表された後のドル／円は、一時１４６．６０円処まで急落する場面があったものの、下値では買い向かう向きも少なからずあり、ほどなく１４７円台を回復する動きとなった。こうした展開が見られた場面では、やはり基本的に戻り売りスタンスで臨みたい。

前回も述べたとおり、当面の下値の目安は７月安値から直近高値までの上げに対する３８．２％押しの水準＝１４６．２０－３０円何処から５０％押しの水準＝１４４．５０－６０円処あたりを考えておくこととする。実際、一昨日（４日）には一時１４６．２３円まで下落する場面もあったが、そこは一つの節目が当座の下値を支える格好となった（左図参照）。

なお、足元では欧州中央銀行（ＥＣＢ）の早期利下げ観測も日増しに強まってきており、ユーロ／ドルは２００日移動平均線を割り込んできている。拙速な下値トライは自重されているものの、対ユーロでドルが強含みとなっていることも事実で、そのぶんドル／円の下値も限られていると認識しておきたい。（※今回はイレギュラーで水曜日の配信となっております。ご了承ください）　　１２月０６日　０９：２０